

感染症発生動向調査委員会報告 6月

今月のトピックス

麻疹については、ピークは過ぎたが、まだ報告が続いている
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎の動向に引き続き注意
咽頭結膜熱、ヘルパンギーナなどの夏季に流行する疾患の報告が、現時点では少ない

【患者定点からの情報】

市内の患者定点は、小児科定点：84か所、内科定点：55か所、眼科定点：15か所、性感染症定点：26か所、基幹(病院)定点：3か所の計183か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の13感染症とを報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計139定点から報告されます。

平成19年5月21日から平成19年6月24日まで(平成19年第21週から第25週まで。ただし、性感染症については平成19年5月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

< 咽頭結膜熱 >

夏季に流行する疾患で、例年6月頃から増加が見られます。横浜市では、今年、6月に入り横ばい状態で、第25週は定点あたり0.47でした。区別では、磯子区での発生が引き続き目立っており、3.5で、港北区も1.2と先月同様高くなっています。また、都筑区が1.5と、3区で警報開始レベルの1.0を超えています。全国では、第24週は0.55で23週の0.56からあまり動いていません。今後、同様の状態が続くのか、さらに増加していくのか、今後の動向には注意が必要です。

平成19年 週 月日対照表

第21週	5月21～27日
第22週	5月28～6月 3日
第23週	6月 4～10日
第24週	6月11～17日
第25週	6月18～24日

< A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 >

今年、昨年同様、高いレベルで増減を繰り返しており、ここ3週は過去5年間と比べても一番高い値でした。第25週は定点あたり2.52で、神奈川県(横浜、川崎を除く)の2.03より高く、川崎市の3.30より低い値です。区別では、引き続き都筑区での発生が目立ち、定点あたり8.0、他には泉区5.3、瀬谷区4.3が高く、3区で警報開始レベルの4.0を超えています。全国でも、昨年同様高い状態が続いていて、第24週は定点あたり2.23です。引き続き注意が必要です。

< 手足口病 >

例年、第28～29週にピークがありますが、横浜市では、昨年は秋に小さな山がありピークは第41週でした。今年も昨年同様、この時期としては低い値で、第25週は定点あたり0.45です。区別では、瀬谷区が定点あたり3.3と、他区に比べて目立ちました。神奈川県(横浜、川崎を除く)は0.55、川崎市は0.73と、どちらも横浜市より高く、全国でも、第19週以降増加が続いていますので、今後の動向には注意が必要と思われます。

< 伝染性紅斑 >

横浜市では、ここ数週間は横ばいの傾向が続いていて、第25週は定点あたり0.61でした。区別では、都筑区が第24週に3.0、瀬谷区が第24週に3.3、第25週に2.0と高い値でした。神奈川県(横浜、川崎を除く)は1.14、川崎市は1.06と、どちらも横浜市より高めです。全国では、増減はあるものの、過去5年間の同時期と比較してかなり高い値が続いていて、第24週は定点あたり0.97でした。引き続き動向には注意が必要と思われる。

< ヘルパンギーナ >

夏季に流行する疾患です。横浜市では、今年は例年に比べて立ち上がりが遅かったのですが、第24週が0.27、第25週が0.52と、増加してきました。区別では、青葉区が2.7と目立っています。神奈川県(横浜、川崎を除く)は1.09、川崎市は2.36と、どちらも横浜市より高い値です。全国では第19週以降増加が続いており、第24週は0.84と、今後急速に増えてくることが予想されます。これから注意が必要です。

< 麻しん >

4月に入り、埼玉県や東京都から始まり、千葉県、神奈川県等、南関東を中心に麻しんが流行してきました。ゴールデンウィーク後は、さらに流行が拡大し、東京都では、高校や大学での集団発生や、休講等が続きました。横浜市でも、第14週以降、小児科定点と基幹定点からの報告が続いています。また、定点とは別に、学校等(保育園、幼稚園、小・中・高等学校、大学、専門学校)からも報告されており、休講も行われています。小児科定点からの報告は、第22週をピークに、基幹定点からの報告は、第21週をピークに、横ばいもしくは減少していますが、発生は続いていますので、動向にはまだ注意が必要です。最新の情報については、横浜市感染症臨時情報(麻しん)をご覧ください。

(http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/report.html)

感染症発生動向調査においては、麻しんは小児科定点から報告され、届出基準では、15歳以上は除くとなっており、一方、成人麻しん(15歳以上)は基幹定点(病院)から報告されることになっています。ただ、成人麻しんの患者が、基幹定点ではなく内科・小児科を受診する場合もあり、その場合は、小児科定点の報告に記載されてきますので、その分も計上しています。

< マイコプラズマ肺炎 >

3か所の基幹定点医療機関からの報告に基づいているため、総数で比較しました。昨年はかなり多く、年間で92人の報告がありました。今回は、第24週に1人、第25週に1人報告があり、今年に入ってから総数は、28人になりました。全国での報告は、過去5年間と比較すると多い状態が続いていますので、引き続き今後の動向に注意が必要と思われる。

< 性感染症 >

性感染症は、診療科でみると産婦人科系(産婦)の11定点、および泌尿器科・皮膚科系(泌・皮)の15定点からの報告に基づいて集計されています。

性器クラミジア感染症では、男性の報告が3月より増えており、昨年に比べても高い値になっています。一方、女性では、15~19歳の報告が2人あり、若年女性への感染の拡がり心配されます。

性器ヘルペスウイルス感染症では、やはり高齢者の報告が多い傾向があり、今回も、女性で、60代が2人、70代が1人ありました。届出基準では、「明らかに再発であるもの及び血清抗体のみ陽性のものは除外する」となっています。

【病原体定点からの情報】

市内の病原体定点は、小児科定点:8か所、インフルエンザ(内科)定点:5か所、眼科定点:1か所、基幹(病院)定点:3か所、の計17か所を設定しています。検体採取は、小児科定点8か所を2グループに分け、4か所ごと毎週実施し、インフルエンザ定点は特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。眼科と基幹定点は、対象疾患の患者から検体採取ができた時に随時実施しています。

衛生研究所から

< ウイルス検査 >

2007年6月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点から37件(咽頭ぬぐい液)、眼科定点から1件(結膜ぬぐい液)、基幹定点8件(咽頭ぬぐい液7件、髄液2件、便1件、全血2件)でした。患者の臨床症状別内訳は、小児科定点は気道炎26人、発熱のみ5人、手足口病3人、発疹1人、結膜炎1人、嘔気1人、眼科定点は角結膜炎1人、基幹定点は喘息性気管支炎3人、麻疹1人、脳炎1人、脳症1人、髄膜炎1人、咽頭炎1人でした。

7月10日現在、小児科定点の気道炎患者2人の検体からアデノウイルスが分離されています。PCR検査では小児科定点の手足口病患者2人の検体からコクサッキーウイルスA16型、気道炎患者1人の検体からポリオウイルス1型、基幹定点の喘息性気管支炎患者1人の検体からパラインフルエンザウイルス3型、他の喘息性気管支炎患者1人の検体からパラインフルエンザウイルス3型とRSウイルスが検出されています。

その他の検体は引き続き検査中です。

< 細菌検査 >

6月の感染性胃腸炎関係の受付は3菌株で腸管病原性大腸菌が1件検出されました。呼吸器系検体の受付は2件でA群溶血性レンサ球菌が1件検出されました。